

組曲

バッハはケーテンの時代、1717年（32歳）から6年のあいだに、6曲のチェロ組曲を書いている。すべて無伴奏である。当時の「組曲」と呼ばれる曲は、古典的な舞曲曲を数種集め、多くはこれに前奏曲がついている。舞曲曲の種類とその数とは、曲によって必ずしも一定していないが、その最も標準的のものは次のとおりである。

第1曲 前奏曲、第2曲 アルマンド、第3曲 クーラント、第4曲 サラバンド、
第5曲 メヌエット（あるいはほかの舞曲曲）、第6曲 ジーグ。

前奏曲	即興的な、ごく自由な形式なものが多い。
アルマンド	「ドイツ風の舞曲」で、4分の4拍子、中庸の速度をもったもの。
クーラント	4分の2拍子、力強く、潑刺たる、フランスの古い舞曲曲。
サラバンド	17世紀の初めころからスペインに起こった古い舞曲曲。4分の3拍子、あるいは2分の3拍子によるきわめてゆるやかな、荘重な舞曲曲。
メヌエット	4分の3拍子、16世紀フランスの農村に起こり、しだいに上流社会に発達して、宮廷の舞曲曲になった典雅な曲。メヌエットのかわりに、ガヴォット、パスピエ、ブレーなどの舞曲曲が入る場合もある。
ジーグ	古くイギリスに起こった民間の踊りで、8分の3、あるいは8分の6、または8分の12拍子などの、きわめて迅速な、活発な舞曲曲。

当時の組曲には、これらの舞曲曲のほかに、アリア、変奏曲、あるいはジーグのあとに、シャコンヌなどの曲を加えたものもある。バッハのチェロ組曲は、6曲ともすべて、最も標準的な古典組曲の形をとって、これにアリアや変奏曲などは加えていない。

（最新名曲解説全集 14. 独奏曲 I より）



無伴奏チェロ組曲(全6曲)

バッハのケーテンにおける職務は、宮廷楽長として、領主レオポルド公の楽しみのために、またその宮廷でのさまざまな宴席のために、独奏曲や室内楽曲、あるいは協奏曲や管弦楽曲を書くことであった。それらの作品は、宮廷楽団のメンバーによって演奏されたのである。(CBS Sony38DC143 解説より)

チェロ自体はすでに16世紀から存在したが、バロック時代になってもその主な役割りは他の楽器や声を伴奏するにとどまり、チェロの独奏曲はきわめてまれな存在であった。バッハの時代でも独奏楽器としてのチェロはまだ新しい存在であったのだから、この曲はそれだけにいっそう画期的作品といわなければならない。(Denon C37-7373-75 解説より)



曲の構成

	第1番 ト長調 BWV1007	第2番 ニ短調 BWV1008	第3番 ハ長調 BWV1009	第4番 変ホ長調 BWV1010	第5番 ハ短調 BWV1011	第6番 ニ長調 BWV1012
第1曲	前 奏 曲					
第2曲	ア ル マ ン ド					
第3曲	ク ー ラ ン ト					
第4曲	サ ラ バ ン ド					
第5曲	メヌエット(第1・第2)		ブレー(第1・第2)		ガヴョット (第1・第2)	
第6曲	ジ ー グ					